



平成 30 年 12 月 1 日 発行 第 24 号

目次

巻頭言

天災に学ぶ

寺池 尚孝 …… 1

陶芸家のひとりごと

藝術について

今井 真正 …… 2

陶芸道中いざ凝り気

土と炎の芸術

岡田 智生 …… 5

私の作品自慢

無理するな、素直であれ

中山 愛子 …… 8

陶芸技術ノート

イッチン描きについて

杉山 雅基 …… 11

活動報告

…… 14

会員便り

…… 15

編集後記

…… 15

付録 展覧会情報掲載申込書 …… 16

編集委員会

委員長 今井 真正

委員 谷口 良孝 片岡 俊彦 増田 淳三

巻頭言

天災に学ぶ

会長 寺池 尚孝

今年は数多くの天災により、各方面に多大な被害が生じております。メンバーの皆様の中にも、ご本人または近親の方で被災された方がおられるかと思えます。まずは、被災された皆様にお見舞い申し上げます。

清水焼団地内も、先般の台風 21 号により、壁や屋根が崩壊し飛んで行った家屋が多数見かけられました。私の家もベランダの屋根が飛び、風がおさまった際に、飛んだ元屋根を探しに行くと、同じく元屋根を探している今井元会長とお会いしました。これまでで、こんな被害初めてでした。ベランダですが、業者に連絡すると 500 件待ちということで、未だに屋根なしの状態です。

また、友人からの写真によると、烏丸今出川辺りは膝上まで冠水し、地下鉄今出川駅構内には階段をつたい、水が川のように流れていました。そんな中、京都市バスは間引きしながらも夜まで運行していたのには、頭が下がります。

その直後に、台風 24 号が再度近畿地方を直撃しました。その時は、21 号の経験もあり、早めに色々対策を講じたため、台風の動きが早かったこともあって、あっけなく通り過ぎた感がありました。関東地方では多大な被害を生じたようですが、こちらでも前の体験がなければ、もっと怖い思いをしていたかと思えます。気持ちに余裕ができたのは確かです。

もちろん、何も起こらないのに越したことはありませんが、何事も経験することで冷静に対処できると思えます。もちろん、怪我をしてしまうと元も子もありませんが ……。

先日も、窯の外側の接合部の電熱線が破断して、窯の温度が上がらなくなりました。以前は、何日も待って専門の窯屋さんに来てもらい、線を直してもらいましたが、前に工程を見ていたので、知り合いの普通の電気屋さんに頼み、破断部を接合してもらいました。

また、出来上がった作品の色がイマイチの時に、応急処置で金属箔を貼り付ける方法や、作品に傷がでてしまった際の穴埋めや彩色も、数多く体験してきました。

今でも、窯の作品を見て動揺はしますが、以前より数倍早く応急処置をできるようになりました。もちろん、傷が出るのは良くないのですが……。町屋のリノベーションではありませんが、陶芸資源の枯渇が叫ばれる昨今、納得いかない作品や失敗したように見える作品を廃棄するのではなく、何か工夫して蘇らせる方法も考えなければいけないのかもしれない。

今回、その一環として、私の任期が終わるまでに、漆器をやっている友人にお願いして、皆様と金継ぎを体験できればと思っております。またご案内いたしますので、その際はよろしくお願いたします。

陶芸家のひとりごと

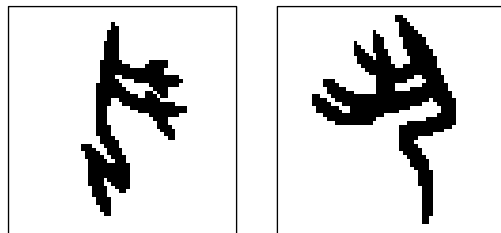
藝術について

陶藝家 今井 眞正

「藝術？」今回は、大変難しい命題についてお話させていただきたいと思います。

最初に、表題にも用いました「藝」という字についてお話させていただきます。今では「芸」という文字が用いられ、旧字体はほとんど使われなくなりました。この文字に対して、私は大学在学当時から大変なこだわりを植え付けられました。この字はもともと上の「艸かんむり」と下の「云」がない状態で「執」が最初の意味を持った言葉だと聞いております。さらに、この字もバラバラにしてみると、「木」・「土」・「卂」に分けることができます。この「卂」（ケキと詠む）は、もともと甲骨文字で、人が両手に物を持つ姿を文字

にしたものだと伝えられています。



「卂」の元になる甲骨文字

総合すると、木を大切に両手で持って土に植えつけるという意味の文字だということがおわかりいただけるでしょう。これがすなわち手業の術として執術とされたと聞いています。その後、意味を深めるために、「艸かんむり」を付け、飾の意味が強い「云」が加えられたということです。

第2次大戦後、漢字の簡略化にともない一番肝心の「執」を略してしまい、「藝」という字が「芸」になったということです。これは余りにも見識を逸したもので受け入れられないという考え方を多感な学生時代に植え付けられた次第です。

と言うことで今も私の出身校であります東京藝術大学は頑なに古い字を使っております。また、父が所属している日本藝術院もこの古い字のまま運用されております。

話がそれてしまいましたが、もともとの言葉の意味自体が、「木を大切に両手で持って土に植えつける術」→ 藝術ということでご理解いただければわかりやすいと思います。明治時代に西欧から Art なる言葉が伝わったときに、日本語としては、この藝術という言葉が当てはめられたわけです。



東京藝術大学の門札



上野にある日本藝術員会館

それでは Art とは何なのでしょう。もともとこの言葉も単純に技術ということばに近い意味で使われていたそうです。それが 18 世紀に入って科学技術が進み、科学技術に根ざしたものが **Technics** という言葉となり、一方で装飾的な部分に重きを置いたものが **Art** というふうに変化していったようです。

古代エジプト時代から始まり、古代ギリシャ時代やローマ時代に残されている美術品の大半は、建物の装飾や室内の飾りとして作られたもので生活を彩るものでした。それ以外には宗教的な意味があり信仰から出てきたものに素晴らしいものがあります。これらのものと同時に、生活にまつわる器や衣類、装身具等も加わり人類が生活する上



壺 古代ギリシャ時代

での潤いを求めたものが藝術の始まりだとおもいます。たとえばルーブル美術館や大英博物館等に展示されているものは、古代の藝術品とされ現代にその素晴らしさを伝えています。

その後の中世のものも近代のものも同様に、人々が生きていく上で、より豊かな暮らしができるもの、より満足した日々が送れるものとして、藝術が発展したものだと思っています。

現代の中で、藝術がどのようにとらえられているのか？ウィキペディアを調べてみると、以下のような記述がありました。

「芸術とは、表現者あるいは表現物と、鑑賞者が相互に作用し合うことなどで、精神的・感覚的な変動を得ようとする活動。文芸（言語芸術）、美術（造形芸術）、音楽（音響芸術）、演劇・映画（総合芸術）などを指す。」

（出典：ウィキペディアより）

うまく説明していると思います。

私たちのようなものを作る人間は、あくまでも勝手にものを作っているのではなく、受け入れられる相手を想定してモノをつくるのが常だと思います。その相手を納得させ、感嘆させるために様々な努力が必要になってきます。

作り手として「歴史の中にすでにあるものよりも、新しい見たことないものを作りたい。」「ライバルが作っているものよりも良いものを作りたい。」「より美しいものを作りたい。」と言った欲が出てくるのが当然でしょう。

それにはまず、自分が納得することが第一にあるべきだと思いますが、肝心なのは自分がどのような位置にあるのかを理解し、自分を高めることが何よりも大切ではないのかと思っています。

- ・今まで人類が作ってきた物をどれだけ深く理解しているか？
- ・自分自身が育ってきた土地や環境等どれだけ武器にできるか？
- ・ライバルたちの動向や最新のテクノロジーがどうなっているのか？
- ・他の人ができない技術やアイデアをどれだけ探求できるか？

等、人よりもすぐれた藝術家になろうとすると、様々な課題が見えてきます。これを一つずつクリ

アし、研鑽することが、求められます。

それと並行して自らが作った作品に共感を求めるようにすることも藝術にとっては、大切なことで、どれだけ雄弁なモノをつくれるかということも重要です。足りなければ言葉で付け加えることも含め努力しなければならぬと考えています。

私たちのようにものづくりを糧としている人間は、作るものの優位性と時代性が「ごはん」に直結しますので、日々の各方面への努力が必要になってきます。しかし一方で、ある程度の効率も求めないといけないため、どこかで妥協しがちになります。これは陥ってはいけないところですので、私としても日々自問自答しているところでもあります。

モノをつくるのが「ごはん」に直結しない方は、思う存分時間をかけて試行錯誤を繰り返し、一つのものを作り上げることができます。そういう立場にある人は大変うらやましく、そういう作り手中から時代に残る作品を作ることができるのではないのでしょうか。

例えばレオナルド・ダ・ビンチは、作品を見ただけで食べることなど考える必要がなかったのだろうなということが伝わってきます。

ルネサンス当時、強大な力をもったメディチ家のバックアップを受けながらも、余りにも執拗に自らの思いを遂げていく姿勢には共感を通り過ぎたすごさを感じるものです。

いつの時代も、時の権力者がパトロンとなり、良いものを（お金のことは気にせず）作らせてもらえる時には歴史に残る藝術品が生まれています。日本でも織田信長や豊臣秀吉が金に物を言わせて作らせた時代には、名品が残っています。私も真似したいのがやまやまですが、今は、私の立場でできる最高のものを残していきたいと考えて

います。

最後になりますが、藝術＝高尚なものという観念ですが、これはおそらく明治時代に藝術なる言葉が生まれたときに、それを実践していた一部の人が自分たちの立場を確固たるものに築きあげるために、意識的に今までのものとの間に線を引き、差別化することによって生じたマイナスの産物ではないかと考えています。もちろんプラス要素もあって諸外国を相手に日本の藝術として打って出るには確固たる信念は絶対に必要だったと思います。しかしながら、今まで述べてきたように藝術は人々の中にあるべきだし、民衆によって育てて行かなければならないものです。

作家は幾ら高尚な知識を持ち、志高く制作していたとしても、それを前面に押し出すことは下品ですし、結果的にはマイナスにしかならないのではないのでしょうか。これは多分に日本人が持つ気質に合っていないような気がします。それによって国際競争力が下がったとしても、私たちが育ててきた感性を棚上げしては、本末転倒な気がしております。

会員の皆さんも科学者の方や技術者、それぞれに武器を持った方がおられます。肩の力を抜いて自身の経験から出てきたアイデアを駆使しつつ制作していただき、人の心を動かすことができるもの、人を驚かせることができるもの、「なんじゃこれは、」と皆で笑えるものをめざして、是非とも時代にのこる藝術を実践してください。

そして創ることの喜びを感じつつ、より深い藝術の世界に、はまって行くことを楽しんでください。

追記：50代も後半になってあらためて、藝術ということについての文章を書くところなるのかと私もびっくりしております。若い頃、自分自身も高尚な世界に身を置くものとして、気位高く肩に力を入れ、歯を食い縛ってものを作っていたように思います。

明治維新から戦後に至る、諸外国に対して負けないように頑張っていた少し腰の座らない時代から、日本人本来の感覚で「良いものを作る」ことに集中できる時代になってきたのかもしれない。

いろんなかたがたに怒られそうな「ひとりごと」でした。



屏風〈御物 唐獅子図屏風〉狩野永徳筆

陶芸道中いざ凝り気

土と炎の芸術

会員 岡田 智生

大阪生まれで、愛知県の三河地方に住んで早や30年近く、陶芸を始めて15年ほどになります。土と炎の芸術に魅せられ、六古窯の瀬戸・常滑・信楽・備前のやきものを中心に、日々作陶しています。

■ 陶芸との出会い

陶芸を始めたきっかけは、仕事帰りに「せともの町、瀬戸市」を通った時に「陶芸体験できます！」ののぼりが、ふと目に入ってとても心に残りました。「ぜひ、陶芸をやってみたい!!」という強い衝動にかられ、あくる日には、その陶芸教室を訪ねていました。

学生時代に一度陶芸体験をしたことがあったのですが、手びねり作陶で「湯のみ」を作ったつもりが「立派な灰皿ができましたね」とスタッフさんにほめられました。

その苦い経験を払拭するため、陶芸教室の先生には「ぜひ、ろくろ成形がやりたいです!!」と強く訴えました。先生からは、「土練3年、ろくろ10年と言われるぐらい、そう簡単なものではありませんよ!」と言われましたが、「5年~10年か

けて、頑張って通ってきます」と答えて、現在に至っています。

■ 京都・やきもの倶楽部との出会い

作陶を始めて5年目ぐらいに技能向上・腕だめしとして「第7回京都陶芸アマコン大賞」に応募し、初入選しました。審査員の方やたくさんのお客様に自分の作品を見ていただけるのは、とても励みになりました。おかげさまで、第8回、第9回と連続して入選させていただきました。

「アマコン大賞」がなくなり、新たな活動として「京都・やきもの倶楽部」の発足に伴い、入会をお誘いいただきました。長い歴史の伝統工芸がたくさんある京都という土地で「やきものを学べる」ということに、とても魅力を感じました。

早いもので、「京都・やきもの倶楽部」の活動も10年目に入りました。会員の方と何度か話題にしてお話をさせていただきましたが、この倶楽部の特徴は、会員のアマチュア陶芸家の作品をプロの陶芸家の先生方に批評していただけることです。

時にやさしく作品を誉めていただき、時に辛口で作品の欠点を厳しくストレートな意見で批評されます。この事がアマチュア陶芸家にとって、とても勉強になります。批評の後、技法や作品についての疑問や問題点にも、ていねいに答えていただけます。会員として本当にありがたいことですし、会員を続けている最大の理由です。

「京都・やきもの倶楽部作品展」も今年で6回目の開催を秋に予定しています。おかげさまで、1回目の作品展から出品させていただいていますが、



かわいいやきものたち



第1回京都・やきもの倶楽部 出品作品



第3回京都・やきもの倶楽部 出品作品



第5回京都・やきもの倶楽部 出品作品

回を重ねるごとに、会員の方々の作品が、作り手の個性にあふれた、バラエティに富んだものが数多く出品され、とても刺激になります。

■「うつわ作り」へのこだわり

ひとくちに陶芸作品といっても、オブジェ、動物、置物、花器など多種多様だと思いますが、自分としては、前述した「ぜひ、ろくろ成形がやりたいです!!」と思った時から、なぜか「うつわ作り」に強く興味を持ちました。

「うつわ」は使ってくれる人がいてこそ、生きるものだと考えています。思わず手にとって、あなたの暮らしに生かしてもらえるうつわ作りを心がけています。

高名な料理人の方が、「料理はうつわに盛ってこそ、完成品である」と言っているのを聞いたことがあります。自分の作ったうつわに料理が盛られると、料理もうつわも両方映えることがあり、うつわ作りへのモチベーションにつながります。



うつわに盛られた料理

■ 吉村楽入先生による「楽茶碗作り」

うつつわりに強いこだわりを持つ自分にとって、茶道具、茶碗の中でも一目置かれる「楽茶碗作り」はとても興味深いものでした。

平成 28 年 2 月、初めての「赤楽茶碗作り」に参加しました。吉村楽入先生の軽妙な話術で、楽焼の生まれた経緯、千利休と楽長次郎との関係、楽茶碗の特徴などを教えてもらいました。ろくろ成形しかやらない自分にとって、驚いたのは、「楽茶碗作り」が全部手びねり成形で行なわれることでした。手びねりで成形することによって、「唯一無二の茶碗」ができあがるというのは、う～んなるほど！と感動しました。

続いて、平成 29 年 2 月に、「黒楽茶碗作り」を行いました。成形の仕方は赤楽茶碗作りと同様でしたが、施釉、焼成の仕方が違いました。施釉は、黒楽茶碗では、赤楽茶碗よりも分厚く塗る必要があります。焼成温度も赤楽茶碗の 900 度よりも高い 1200 度で焼き上げます。1200 度の高温ですから当然、窯に近寄るだけでも、とても熱気を感じます。やけどしないように防火服、防火手袋を着けて、自分の作品を窯に出し入れして焼成する経験は、とても貴重な体験になりました。「楽焼茶碗作り」を体験することで、茶陶・茶道具への興味がとても高まりました。



赤楽茶碗



黒楽茶碗

■ まき窯焼成の魅力

やきもの倶楽部では、理事の森田隆司先生のお誘いで、平成 29 年 5 月に京都綾部市にある「穴窯焼成」が行われました。

「まき窯焼成(穴窯・登り窯焼成等)」の魅力はガス窯や電気窯で、ある程度計算ができる焼成に対して、まきによる自然・天然の炎で焼成することで、作品の置き場所や炎の当たり具合により、計算外・予想外の作品に焼きあがることです。

綾部市の「穴窯焼成」でも、作品が重ならないように利用した貝殻が、釉薬と一緒に溶けてしまい、「うつつ」としては残念ですが、「やきもの」としてはとても風情のあるものになりました。



京都綾部市でのまき窯焼成作品

通っている陶芸教室でも、先生のご厚意で 1 年に 1~2 回、「まき窯焼成」に参加させてもらっています。アマチュア陶芸家の自分にとって、まき窯焼成体験は貴重な機会です。暗闇の中、まきをくべながら、じっと炎を見つめていると、心の琴線が震え、何とも言いえない不思議な感覚になります。

今後のまき窯焼成を楽しみにしています。



高温のまま作品を取り出す



陶芸教室でのまき窯焼成作品

■ これからの精進

おかげさまで、15年近く陶芸に携わることができています。その間にいろいろな人とのつながりができました。

京都やきもの倶楽部での活動はもちろんのこと、瀬戸市の陶芸教室から、今では岐阜の多治見市・土岐市、愛知常滑市などへ作陶しに行くこともあります。時には岡山備前市を訪ねることもあります。

陶芸技術としては、ろくろ成形の棒挽きから、

最近は一掴みができるようになってきました。そのおかげで、大鉢・大皿作りにもチャレンジしたいです。また茶の湯・茶道への興味を更に深め、茶陶・茶道具作りにも挑戦していきたいと思います。

何気なく始めた陶芸・やきもの作りですが、今では、ライフワークとして、大切な活動になっています。これからも「土と炎の芸術」に突き進んでいきたいと思っています。



国際アマチュア陶芸展伊万里 2018 出品作品

私の作品自慢

無理するな、素直であれ

会員 中山 愛子

最近の「HOMURA」は、益々内容が充実していますね。皆様立派なお考えを持たれて書いていらっしゃるの、私などが自慢することもなく、執筆はご遠慮したかったのです。夫が「素直に自分の考えを書けば？」と申しますので、ずうずうしく書かせていただきます。

昔の 65 歳といえは結構な高齢者で、隠居する

年でした。現在、私は幸いにも健康で、陶芸につきものの腱鞘炎や運動不足によるひざの痛みはあるものの、温かい家族に恵まれて陶芸に専念しています。長男 42 歳が高校在学中の高校に電気窯があったことから、PTA を中心に陶芸を始めて、25 年になります。灯油窯を買ってからは、15 年、460 回ほどの窯焚きをしました。

ずっと展示会に出品されている方には、シマウマの模様が印象に残っていらっしゃるかと思います。



平成 16 年 4 月 第 8 回日本陶芸ガラス展
(上野の森美術館ギャラリーにて)

特に自慢という作品は、残念ながら一つもありません。でも作りたいという思いだけは、ついでないのです。年間 6 か所の公募展に向かって頑張っています。それは自分が元気で作れているという喜びに繋がります。また、ちっともうまくならないのに、作りたい物が次々にでてきます。

その一つが万華鏡の胴体です。まだ大きさとか長さとかが把握できてなかったのが、完成に至っていません。友人の万華鏡作家さんに見せた 3 個のうち 1 個だけが、何とかできそうという答えをもらいました。その後作った作品がこのヤモリのやきしめです。20 cm 以上の長さが必要なのですが、これも縮んだので、失敗作品です。ヤモリは大きな花瓶のふくらみに張り付けたりして遊んでいます。私の窯小屋には、ヤモリが至る所に隠れ住んでいます。いつの間にかとてもいとおしく思う同居人です。



万華鏡を覗きたいヤモリ

次に作りたいものの一つが、水滴兼ペーパーウエイトの小品です。昨年の京都・やきもの倶楽部で、清水焼の郷賞を頂いたものの続きです。今年の 4 月、上野の森 陶芸ガラス展で出した作品の一つが仲間にも好評で、書道家の方におもしろがられてお買い上げいただきました。それは大好きなムーミンの家を模したのですが、買ってくださった方にはイタリア南部のアルベロベッロに見えたそうです。ちょっと芸術性はないのですが可愛いですよ。



水滴 アルベロベッロ

また、いつもワクワクしながら参加する穴窯も興味をそそる一つです。この京都・やきもの倶楽部で仲良くして頂いている布目さんご夫妻にお誘いいただいてから、またお声がかかるのを楽しみに待っています。森田隆司先生にも 2 回焼いてもらいました。もう焼けなくなったと伺い残念に思います。大した作品でなくても興趣の作品になっ

て出てくる穴窯の魅力を知ってからのものです。



庭のカサブランカのための穴窯花瓶

今年、私が入っている日本陶芸ガラス芸術協会の上野の森美術館ギャラリーでの10周年展示会がありました。記念に茨城県陶芸美術館館長の金子賢治氏をお呼びして講評をいただきました。しばしの酷評のあと「伸びしろのある作品」と評価されました。(えー！66歳だよ、25年もやっけていてまだ伸びる?)と甚だ疑問で、胸の内で作品のフォローだろうなあとお礼のお辞儀をしながら鼻白んでいる不遜な自分がいました。しかし、五日間の開催中に同時期にやっている神奈川県民

ホールに出していた同じようなものを見た方が、「あちらもよかったけどこっちが特にいいですね」だの、古い仲間に「作風が変わって新鮮を感じる」など数々の高評価をいただきました。そして、やっとここで金子先生の言葉を素直に信じることにしました。その後、釉薬の掛けすぎを改良し、それでも3個の失敗作品を経て、まだまだ完ぺきではなかったのですが、53回鎌倉美術展に出し、鎌倉市長賞をいただきました。



第53回 鎌倉美術展作品「Bloom」



金子先生に講評を頂いた作品「Bloom」

「Bloom」は、去年の母の日に長男の妻からもらった胡蝶蘭のつぼみを想ってつくりました。去年の京都にも同じ題で出して、平凡な形で、もっと青い色の面積が多いほうがよかったね、みたいなことを講評していただきました。

今年の2月にセブ島に滞在し、毎朝散歩する霊園に咲きにおうプルメリアの白い花のつぼみが夥しい数、自然淘汰され地面に落ちているのを見ました。こんなにきれいにふっくらとして明日は咲こうとしていたのに、という花の想いも作品にしています。

最近、お連れ合いをなくされたり、介護したり、体調不良などで陶芸から離れた友人が増え、大変寂しく感じています。いつか私にも訪れるその日まで精進し、楽しみたいと思います。窯小屋の前は市道で今年に入って階段が立派になりました。息子がペイントした空の様子は、窯小屋が「空窯」だからです。何かわからないけど、いつの間にか私を後押ししてくれているように感じます。こんな小屋で毎月1回の素焼きと本焼きをしています。いろいろな方たちに応援を受け、励ましてもらっています。それだからこそいろんな人に感謝して、あきらめないで、もう少し励んでみようと思います。これからもお付き合いのほどよろしくお願いいたします。



サーフボード屋さん間違えられる「空窯」

陶芸技術ノート

イッチン描きについて

京都府立陶工高等技術専門校
訓練課長 杉山 雅基

今回は「イッチン」について全く経験の無い方を対象に原稿を書きます。先にお断りしておきますが、私はイッチンが本職ではないので、イッチン専門の方が読まれたら「？」マークが付くかも知れません。実際に本格的な技法は専門の方にお聞きください。

まず「イッチン」とは、友禅の糊を盛り上げる技法を陶芸に応用したもので、元々は久隅守景と言う日本画家が雅号に「一陳斎」と名乗っていたところからきているようです。「イッチン描き」とか「イッチン盛り」などの呼び名で知られている、泥状の粘土や化粧土を線状に盛り上げて描く技法です。



イッチンの作品

では、道具の紹介からしてみましよう。

「カップ」と言われる古くから使われてきた紙を三角に丸めて防水効果のある「柿渋」を塗ったものが一般で、今でも染色の材料を売っている販売店に行けば手に入ります。柿渋を塗って防水されていますが、やはり使っているうちに染み出して来るので内側にケーキのデコレーションに使う薄

いナイロン製の「絞り袋」を入れます。



紙に柿渋を塗った「カップ」



ナイロン製の絞り袋

ビニール系のカップは防水性に優れ、慣れない方にはこちらの方が使い易いと思いますが、今は製造されていないらしく、最近はかなり入手困難になってきました。



ビニール系の「カップ」

ゴム製のスポイドは繊細な模様は描きにくい反面、ある程度簡単に使えるため、今回はこのタイプをお勧めします。



スポイド写真

カップを用いる際に大事なものは「口金」です。



口金の写真

ラフな模様を描くには口金は要りませんが、細い線や同じ太さにしたい時は真鍮製の口金で太さを調節します。これもカップと同様、染色材料店で購入できます。

大きさはカップの口に合わせて大きさを決め「〇号」と表記されますが、出口の太さは号に関係無く、購入時は殆ど開いていない状態で、ヤスリで削って調整します。購入されるなら、7号程度が良いと思います。



口金の穴の写真

通常はカップの内側に「中金」を入れ外から「口金」で挟む様にして使用しますが、今回はスポイドを使い、太さを細く均一にする為に、口金を装着して使用します。

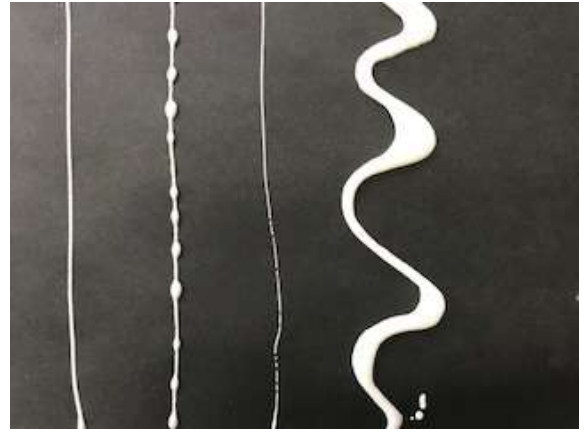


口金付きスポイト

次に、肝心なのはイッチン描きに必要な「泥」の調合です。単純に素地と同じ「共土」を使うか「化粧土」を使う方もおられますが、調合するなら一例として、(上石乾粉 10 : 河東カオリン 4 : 一号石灰釉乾粉 2) を水で固めに、(水分が多いと線が盛り上がらないため) 時間をかけて (粒があると口金が詰まるため) よく擦ります。さらに、800~1000 番程度のフルイで通して使います。

線の太さを揃えるには、絞る強さと進むスピードを合わせる必要があります。絞る力にたいして早く動かすと細くなり、遅いと太く線が揃いません。あくまで、太さは口金の穴の大きさを調節し

ます。



描いた線の太さ

写真の1番左が進む早さと絞る力が合っているもので、均一の太さになっています。二番目が進む早さより絞る力が強いもので、太いところや細いところがあり、3番目は絞る力より早く進んだもので、全体的に細く、途切れたところもあります。また口金を付けず、ラフに使うと一番右の様に太く柔らかい感じになります。スリップウェアなどはこんな感じですね。

泥の調整ですが、基本的には水だけで硬さを調整します。硬ければ硬いほど、線の盛り上がりはいいのですが、硬過ぎると均一な線になりません。当然、柔らかいと盛り上がりません。又、乾いた時に線に亀裂が入る場合があります。その場合、布海苔を少量入れると切れにくくなりますが、入れ過ぎると乾いた時に痩せて盛り上がりが少なくなります。痩せ防止に水ガラス(珪酸ソーダ)を入れる方法もありますが、入れる量が非常に難しく、これは色々試されてからお勧めします。

多くは素材の色のまま、盛り上げる目的で使う技法ですが、応用として数%程度の下絵顔料を加えて色化粧で描くことも可能です。また、先程紹介しました様に、泥の水分を多くして勢いよく描く「スリップウェア」も同じ道具と材料で応用することができますから、色々試してください。

最後に、イッチン描きで制作した例を挙げておきます。詳しくは述べませんが、皆さんも簡単な方法から色々チャレンジしてみてください。



交趾絵具を施したイッチン



イッチンの内側に呉須で着色した作品

	開催場所	出品会員数	入場者数
第1回	みやこめっせ	27名	545名
第2回	清水焼の郷会館	27名	242名
第3回	きよみず苑	26名	250名
第4回	みやこめっせ	25名	346名
第5回	みやこめっせ	24名	250名
第6回	みやこめっせ	19名	181名

であった。第1回の入場者数が極端に多いのは、初めての展覧会であったことに加えて京都新聞に記事が掲載されたため、今回の入場者数が少なかったのは、出品会員数が減ったためと思われる。

作品展には会員19名、賛助出品者8名の参加があり、出品総数は45点であった。そのうち、会員作品37点の中から秀作8点に京都・やきもの倶楽部会長賞(1)、副会長賞(2)、吉村賞(1)、奨励賞(2)、清水焼の郷賞(2)が授与された。

会長賞	増田淳三	「See Through Tube」
副会長賞	寺西健二	「KUBIRE I」
	中山愛子	「アルベルベッコの空」
吉村賞	岡田智生	「黒釉茶碗 閃光」
奨励賞	安部邦子	「12th」
	布目ゆかり	「変心」

清水焼の郷賞

稲垣薫	「瑠璃のしずく」
片岡俊彦	「増殖する輪」

会期最終日には、寺池会長を初めとして審査員の中から4名の先生方にご出席いただき、出展作品の講評会が行われた。受賞作品に関する講評についてはこの後発行される予定の作品展図録に掲載される。

講評会終了後、四条河原町にあるレストラン“ミュンヘン”に場所を移して講演会・表彰式・懇親会を開催した。講演会では、今井副会長から「日本の陶芸の歴史について 駆け足で……」と題してお話を伺うことができた。この講演会は初めての企画であったが、好評で、来年も続けて行こうということになった。表彰式では受賞者に表彰状が授与され、会長賞にはトロフィーと副賞、副会長賞には副賞が手渡された。授賞式に出席できなかった方には別途郵送で授与された。食事をしながらの懇親会はいつも通りの和気あいあいの雰囲気の中で無事終了した。

活動報告

第6回京都・やきもの倶楽部作品展 開催

開催日：平成30年10月30日～11月3日

昨年に続いて、今回の作品展も京都市勧業館“みやこめっせ”美術工芸ギャラリーAで開催した。会期中、会場に訪れた方々の数は例年になく少なく、181名であった。ちなみに過去の開催場所、出品者数、入場者数を調べると、

会員便り

個展・グループ展・企画展・公募展 (平成30年4月～平成30年9月)

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるってお申し込み下さい。用紙は、すでに配布しております「展覧会情報」掲載申込書の最新版(2017/11発行)をご利用下さい。

平成30年

- 4月27日～5月16日
今井政之・眞正・完眞 陶展
京都陶磁器会館(京都市)
今井 眞正
- 5月2日～5月8日
第47回 日本伝統工芸近畿展(大阪展)
あべのハルカス近鉄本店 タワー館 11階
美術画廊 アートギャラリー(大阪市)
吉田 貢(入選)
- 5月15日～5月20日
2018年 第57回 日本現代工芸美術展
京都市美術館 別館(京都市)
森田 隆司、玄 平(入選)
- 5月23日～5月28日
第47回 日本伝統工芸近畿展(京都展)
京都高島屋 7階 グランドホール(京都市)
吉田 貢(入選)
- 9月17日～9月30日
アートギャラリー 2018
文化パーク城陽(京都府 城陽市)
増田 淳三(入選)

凡例

- 開催期間
- 展覧会名
- 展覧会場(開催地)
- 出品者名(入選、入賞)

編集後記

本号では今井眞正先生から「藝術について」という表題で投稿していただきました。その中で、作り手として「歴史の中にすでにあるものよりも、新しい見たこともないものを作りたい。」「ライバルがつくっているものよりも良いものを作りたい。」「より美しいものを作りたい。」と言った欲が出るのが当然でしょうと書いておられました。

私は、今まで工学の分野に身を置き、科学に精進して来ましたが、その際、自分で選ぶ研究のテーマとして「新しい発想がある。」「オリジナリティがある。」「賞賛を得ることができる。」という条件を課してきました。このことは、先生の言われる作り手の欲と大いに通じるものがあり、やはり「藝術」と「科学」は人間としての共通の営みかもしれないという思いに駆られました。

さらに、藝術は高尚なものではないと言い切り、「ごはん」が無くても情熱を失わず、最高のものを作り続けたいといった言葉の中に先生の心の優しさを感じました。これからも心して「藝術」に励んでいきたいと思っています。

今回の「展覧会見聞録」のコラムは、事情によりお休みとさせていただきました。また、本号の発行が大幅に遅れることとなり、投稿していただいた方々および読者の皆様には深くお詫び申し上げます。

(編集委員 片岡俊彦)

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)